B7

露國神學博士ウ、デ、クドリャフツェフ述
日本　松本高太郎譯

神の觀念の本源を論ず

正教會發行

252
261

特49
210

神の觀念の本源を論ず

凡そ諸觀念の中に在りて最も研究の必要あるものは神の觀念なり。何となれば此觀念は諸觀念の根源にして吾人の知識と德義に至大の影響を及ぼすものなればなり。故に觀念に關して吾人の研究すべき形而上學の第一の問題は此觀念が果して眞理なるか換言せば此觀念が果して實際と應合するか否かを解決するに在り。然れども此問題の解決は吾人の知識に於ける此觀念の發生問題の解決と密接の關係を有す。何となれば此觀念が若し自然界に於ける險惡なる現象に對する恐怖心より起り若くは勸善懲惡の方便より出でしものならんには毫も眞理と爲すに足らざれども、若し此觀念が人心固有のものにして吾人の心意に作用する此觀念の本體なる至上の實在の反應ならんには其眞理たる疑ふべからざればなり。

上述の如く神の觀念の問題は一般哲學の問題として研究の必要あるものなるが、尙此外に輓近の唯物論者の推論に對して一層研究の必要を感ずるなり。輓近の唯物論

明治
39 4 9
交内

者は神の觀念の實體を排斥するに止まらず此觀念が人類間に發生し發達せし原因を示さんと欲す。卽ち彼等は種々の假定說に於て宗敎の起源を論じ宗敎の觀念が妄想若くは偶然よりして出でしを證せんと力む。故に吾人は神の觀念に關する諸說を批判し其謬見を排して正確なる見解を發見せざるべからず。

之に依りて吾人は先づ神の觀念の客觀なること及び其眞理なることを認めず此觀念を以て偶然若くは外部の原因よりして發生せしと爲す無神論者の說を批判せん。

曾て詭辯家が唱道し後ち第十八世紀の哲學者等が主張せし說に據れば神の觀念は神官の詐若くは立法者が方便上より案出せしものにて、彼等が之を案出するに至りしは自己の勢力を社會に及ぼさんが爲め或は人民に對して威力を保たんが爲めなりき。彼等以爲らく自己の死後は民心離れ律法は空文に歸すべしと、故に彼等は律法の威力を維持せんが爲に不死の監視者卽ち諸神を案出し以て律法若くは政權の威力を補へりと。

而して論者は自說の眞理なるを證明するに古代に於て宗敎と政治が密接の關係を有せし歷史を論據と爲す。例へば彼等論證して曰く、古代に於ける政體は神政にして

宗敎及び政治上の權力は神官の掌握する所なりしと。尙彼等は論證して曰く、古代の立法者例へばゾロアストル、ミノス、ヌマポムピリイ其他の如きは皆律法の威力を維持するの方法として宗敎を利用せりと。

然れども是等歷史上の事實は古代に於ける宗敎と政治の關係を示すに過ぎずして決して宗敎の起源を說明するものに非ず。何となれば若し宗敎が神官僧侶及び立法者と同時に現出せしとせば後者は前者の原因者たらざると明かなればなり。加之歷史の事實は却つて宗敎が神官僧侶及び立法者に先だちて存せしを證明す。吾人は古代の族長時代に於て神官僧侶無かりしも宗敎の存せしを見るなり。卽ち當時に在りては族長自ら宗敎の任務を行ひ神官僧侶の職を兼ねたり。例へば希伯來人、希臘人、羅馬人等の間に於けるが如し。現時に於ても吾人は神官僧侶を有せざる民族を見ることあるも未だ宗敎の觀念を有せざる民族を見ず。而して古代に於ける神政に至りては是れ一般人類の政體に非ず且つ原始の政體に非ざりしことは歷史の證明する所なり。或る民族の間例へば支那、羅馬、希臘には此政體存せざりしにて、且つ此政體と雖も從來存し來りし宗敎の勢力に依賴する所多かりき。斯く宗敎は神官僧侶に

先だちて存し又立法者に先だちて存せしこと明かなり。古代に於て立法者は宗教と密接なる關係を結べり。何となれば當時宗教は社會に至大の勢力を有し一民族の生活を左右したればなり。故に立法者は律法をして其威力を保たしめんが爲に宗教を利用せざるを得ざりき。此の如く論者の說は宗教の起源の歷史と矛盾するものなり。又論者の說に曰く、宗教の觀念は人智の未開の時代に發生し且つ發達せしものにて當時社會に尊戴せられたる偉人の言は容易に信用せられたりと。然れども宗教の觀念が或る人に由りて案出せられたりとせば人智の未開は却つて之が傳播を妨げしならん。何となれば知識の開發せざる者は目に視、手に觸るゝもの、外他を信ぜざるものなれば也。故に未開の人民に感覺以上の者を信ずるの能力ありとせば是れ外より注入せられたるに非ずして彼等の心裡に存する深遠なる根源より來りしものとせざるべからず。而して此根源なからんには彼等の智力が或る者の案出に係る無形物を信ずることなかるべし。

又論者が主張する所の道德上の制裁を加へんが爲に神の觀念を案出せしとの說も亦取るに足らず。何となれば此の如き案出は人民をして之を信ぜしむるを得ざるのみならず却つて反抗を招くべければ也。人は或る場合に於て甚だ輕信淺見にして他人の虛構揑造に欺かるゝものなり。然れども之に欺かるゝは自己の傾向に反對せざる場合にして自己が苦痛窘迫を感ずる場合に非ざるなり。故に外物にのみ支配せらるる未開の人民が有形の刑罰を恐るゝに超えて無形の存在物を恐れたりとは信ずべからず。若し現時に於てさへも社會の制裁及び律法は無形の立法者及び死後の裁判に比して其威力を保つ場合多しとせば、況んや宗教の觀念も德義の要求も存せざる時代に於て無形の制裁が有形の制裁に超えて威力を保つの理あらんや。彼の感覺と利己心に支配せられたる時代に於て方便的考案を以て人民に神の存在を信ぜしむるを得宗教の嚴命を奉ぜしむるを得たりとは吾人の信ずる能はざる所なり。

尙終りに臨んで一言せんに論者の說は宗教の觀念の根本的起源を說明するものに非ず。彼等の說に據れば宗教の觀念は神官僧侶或は智者立法者の案出に係ると。然れども神官僧侶立法者は何處より此觀念を輸入せしか。何の考案を以て彼等は毫も據るべき所なき無形の存在者を其思想に喚起するを得たるか。論者は一個人の利己心及び野心を以て此觀念を喚起せし原因と爲す。然れども利己心野心の如きものは吾

人に此觀念を案出するの要素を與ふるものに非ず。凡そ妄想には其妄想を構成するの要素を要し要素なくして妄想を構成するを得ざるは心理學の證する所なり。去れば神官僧侶立法者は固より自己を圍繞する世界に於て無形、永遠、全能の實在の觀念を案出するを得ずして、此觀念が或る目的の爲に故意に案出せられたるものに非ざるや明かなり。

然るに或る論者は宗教の觀念の本源を單に外部の原因より説明するの不充分なるを認めしかば此觀念の構成せらるゝ原因を人類の心裡に於ける主觀の發作に歸せしめんとせり。抑も唯物論者は昔時より宗教の觀念の發作の動機を自然界に於ける險惡なる現象に歸せり。例へばルクレチウスは timor primos fecit Deos と言ひしが如し。而して現時の學者間にも天體及び氣象上の現象は原始の人類に恐怖と敬畏の念を起さしめ彼等を驅りて宗教を作らしめたりとの説を爲す者少からず。

去れど此説は宗教の觀念の發作の動機即ち自然界の險惡なる現象と其實現即ち宗教との接續を論理的に示さゞるなり。何となれば自然界の險惡なる現象は人をして恐怖せしむるは事實なりと雖も斯る場合に如何にして恐怖心は敬畏心を喚起するか、

換言せば恐怖其者に宗教が何の關係を有するかは全然説明せられざればなり。險惡なる現象に對する恐怖心の發動は人類に於けるよりも動物に在りて一層甚だしきなり。然るに動物の恐怖心は何故に敬畏若くは宗教に變ぜざるか。人は現時に於ても數〻自然界の非常なる現象若くは危險なる現象に接して恐怖を感ずるとあるも敬畏を感ずるとなく又宗教的感情を惹起せざるなり。是れ敬畏と恐怖とは其性質に於て全然同一物に非ざるを證するものなり。

又論者は未開の民族間に在りては宗教の感情は恐怖の狀に於て表現せられ諸神は自然界の險惡なる現象の諸點を具へたる實在として思念せらるゝ事實に基きて自説を論證せんとす。然れども一方より論ぜんに此の如き宗教の感情の表現は未開民族間に於ける通有の現象に非ず又原始に於ける現象に非ずして毀損せられたる宗教の弊に過ぎず。是れ猶蠻人の狀態が人類の原始の狀態の表現に非ざるが如し。又他方より論ぜんに宗教的恐怖の感情は自然界の險惡なる現象に對する普通の恐怖心と同一なるものに非ずして且つ自然界の險惡なる現象より出づるものに非ざるなり。宗教的恐怖は萬有を主宰する至上の見えざる能力を認識すと雖も普通の恐怖は自身一己

の危險を認識するの外何物をも認識せざる也。故に宗教的恐怖は自然界の現象例へば暴風雨、日蝕、雷鳴等に對して起るに非ずして是等の自然界の現象を主宰する至上の實在に對して起るなり。若し論者の說の如くんば自然界の現象を出だし萬有を主宰する實在の觀念は何處より來りしか。又恐怖を敬畏に變ぜしめ假令不完全ながらも自然界の普通の恐怖と異なる宗教の感情の基礎たる觀念は何處より來りしか。自然界の現象は如何に險惡なるも若し人類に神の觀念が豫め存せざらんには如何ぞ人を驅りて此觀念を構成せしむるを得んや。故に若し漠然ながらも人類に至上の實在の觀念存せば自然界の險惡なる現象に接して人類が此觀念を其腦裡に喚起するは容易なるも、若し之に反して人類に至上の實在の觀念存せざらんには如何なる天體及び氣象上の現象も神の觀念を其腦裡に喚起せしむること能はざるべし。而して人類に至上の實在の觀念存せざらんには自然界に對する恐怖は普通の恐怖に終り萬有を主宰する實在の觀念を喚起することなかるべし。

以上論ぜし如く論者の說は若し假定し得べくんば野蠻なる民族若くは極めて蒙昧の社會の信仰に適用し得るに過ぎずして、宗教が人類社會一般に普及すると萬世萬民

を通じて存在するの事實は論者の說の論據なきを證するものなり。若しルクレチウス及び近世の唯物論者が論ずる如く恐怖が果して諸神を出だせしならば後世此幼稚の恐怖が消散せし時に於て宗教は何者に依りて支持せらるゝか。學術美術及び社會の進歩と共に自然界の現象に對する恐怖心の消散せし時に於て原始の人類の迷信が如何にして到る處に傳播し現時尙依然として持續せらるゝか。若し果して恐怖心が宗教を作りしならば此宗教は早く既に破壞せられ其痕跡だも止めざるべきなり。

尙近世の唯物論者は人が理想を作るの傾向を有し妄想の作物を實際の存在物として念想するの能力あるを論據として更に說を立て神の觀念の本源を說明せんと企つ。彼等論じて曰く、人は自己の周圍の現實の事物に不滿なるが故に完全なる事物を想像して理想を作り又自己及び自己の周圍の人に不滿なるが故に完全なる人を想像して理想を作る、而して人は遂に此理想を實際の存在物視し客觀的實物視して之に對す、一言を以て謂はゞ人は神及び宗教の觀念を作る、人が神の觀念を構成するに免るべからざる結果として神人同形的の擬人を以てするは神及び宗教の觀念が此の如くにして出でしを證するもの也、凡そ周圍の事物に對する人の不滿及び事物の不完全

は理想を構成せしむる原因なるが如く之と同じく人の不完全墮落は神の觀念を構成せしむる原因なり、故に諸神は人が斯くあらんことを期待する理想にして此理想は人が斯くあらんことを期待するに因り又期待する場合に出づるものなりと（フェイエルバフ及び其學派の說）。

去れど此說は理想と理想を作る能力との定義を混同するものなり。勿論人は實際に存せざる物の假象を作るの能力及び傾向を有するものにして此能力の下等なるものは妄想と爲り高等なるものは美術と爲るなり。此能力は初め言語卽ち形容比喩と擬人に於て表示せられ後ち美術的理想に於て表示せらるゝるなり。然れども此能力に依りて作られたる理想と觀念卽ち神の觀念とは其實質に於て全然別種のものたることは敢て辯明を待たずして明かなり。唯だ理想は觀念が概念、感情、傾向の形式を受くることあるが如く時として外部の美術的形式を受くることあるのみ。

美術の理想と觀念との差異の存する點は前者に在りては其理想の實際ならざるを明白に認識することが構成の要素を成し後者に在りては其觀念の眞實なるを認識することが必然の記號を成すに在るなり。吾人は眞理、善、神の存するを確信し此信念は吾人の知識及び德義の上に實行せらるゝなり。然るに之に反し妄想の作物は假令其物が最高の美術にして如何に眞實を裝ふも到底虛構なる主觀的の作物なるを自證するを免れず。唯だ小兒が妄想の虛談を聞きて之を信じ或は瘋癲者が自己の妄想より出でたるものを眞實として信ずることあるのみ。去れば美術の最高の作物卽ち理想と雖も其眞實ならざるを自證するの點に於て他の妄想の作物と毫も異なる所なし。凡そ人の構成に係る理想は其何の理想たるを問はず皆理想として主觀的のものとして認識せらるゝ性質を有す。人皆理想とは或る物が知識及び妄想に依りて將に斯くあるべきを想像せられたるものなることを認識するなり。故に或る物が將に斯くあるべきを想像せらるゝの事は其物が實際に存在せざるものとして人に想像せられたるを證するものなり。

然るに神の觀念に至りては全く之に反する性質を有す。吾人は神の觀念を思想するに此觀念の對象が實際に存するものとして思想し此觀念を客觀的眞理として認識するに非ざれば此觀念を思想する能はざるなり。斯く此觀念の認識は强大なる勢力を有するが故に此認識は吾人をして凡て神の觀念と密接の關係を有する妄想の作物を

眞實の存在として思想せしむるなり。是に於て前の理論中に見たる疑問は解釋せらる。卽ち何故に人は妄想が神の觀念と關係を有する場合には如何に妄誕なるも（異教の神傳神話の如き）之を信じ、妄想が宗教的性質を有せざる場合には如何に眞實を裝ふも常識の上より之を眞實として認めざるかと問はゞ、是れ宗教上の妄想には先入的に眞實として認識せらるゝ神の觀念の新要素加はりて其妄想を同化するに因るなり。若し然らざらんには實存せざるものを實存するものとして想像する吾人の能力が或る一の觀念卽ち神の觀念に對する場合にのみ其作用を現じ他の場合に其作用を失ふの理由を解釋すること能はず。人は稗史小說其他妄想の作物なる學者、豪傑、國民の如き理想を實在のものとして信ぜざるも最完全の實在の理想及び此理想と關連する想像の作物を實在のものとして信ずるなり。是れ何に依りて然るか。前者の理想は絕對の實在の理想に比すれば最も人の感覺に近く之を信ずるは後者を信ずるに比して甚だ容易なり。然るに實際に於ては之に反するを見る。之に依りて吾人が無形の實在を確信すると又實際に存在せざる物を妄想するとは其動機に於て全然異なるを見るべくして神の觀念の起る動機は普通の理想の起る動機と其根據を異にするを知るべし。

尙神の觀念は此他に於て妄想と全く異なる特質を有するなり。卽ち此特質とは人が此觀念の對象と活ける關係を有し此觀念が人の生活行爲に至大の影響を與ふる點に存するなり。彼の審美的作物は理論の性質を有する美術の快樂を與ふるに過ぎず。故に之を眞實の物として信ぜざる吾人に對して活ける關係を有せず又吾人の生活に對する影響は或る概念が吾人の行爲に對して有するが如き影響に過ぎざるなり。而して若し美術の作物が知識に訴ふるよりも感情に訴ふること大なる場合には知識の概念に於て缺陷を生ずるなり。之に反して神の觀念は妄想の作物のみならず鮮明なる知識の概念と雖も有するを得ざる活ける强大なる勢力を有す。人類生存以來の歷史に徵するに宗教は吾人々類の道德及び社會的生活を左右する有力なる活動者なり。宗教は吾人の行爲に制裁を加へ吾人をして損失を甘んぜしめ艱苦を忍ばしめ獻身せしむるものにして是れ到底妄想若くは知識の概念の爲し能はざる所なり。宗教は國家の制度の根本を確定し社會の生存の狀態を變革す。要するに宗教は人爲を超絕せる至大の勢力を有するなり。去れば唯物論者の論ずるが如く現狀に對する不滿より

出でし妄想の作物が眞實なる概念と雖も猶且つ有するを得ざる其勢力を有すとは誰か常識を有する者にして思想し得べけんや。宗教が人類に對して至大の勢力を有するは此宗教中に眞理の勢力在伏するを證するものなり。而して此勢力を宗教に與ふるものは吾人の妄想に非ずして宗教が固有する內部の獨立の眞理なりとす。

實に神の觀念の內容を觀察する時は其內容が妄想の內容に超絶するを認むるに難からず。妄想の作物は一見實物と遠く離隔するが如しと雖も其組成の要素は實物と密接の關係を有す。又理想の表象の材料は實物より摘採せられ妄想が之を過大にし或は縮少し或は美術の法則に從ひ或は專恣に之を綜合して變形したるものに過ぎず。然るに神の觀念に至りては如何に綜合し或は過大にするも到底觀念の要素を形成せしむること能はざる特質を有す。例へば絶對的神靈の觀念、自存の實在の觀念、或は無限、永遠、絶對の完全の概念等の如き是れなり。去れば妄想が如何に其力を逞うし人の固有性偶有性の範圍を擴張すとも若し吾人の心裡に伏在する無限者の觀念に導かるゝに非ざれば決して神の觀念の固有する絶對的性質を案出すること能はざるべし。

去れば論者の說の如きは神の觀念の此特質を忘失したるものと謂ふべし。彼等は種々の民族の宗教思想中に人の天性を過大にしたる神人同形的思想の存するを發見し此思想を以て神の觀念の內容及び本質と爲せり。然れども神の觀念の本質は神に人間的完全を附加したるに非ずして彼に絶對的完全及び絶對的存在を附加したるものなり。故に最も不完全なる幼稚の宗教思想に於ても人は神を以て人間以上なる絶對的最完全の實在と爲すなり。而して或る民族間に在りて如何に神の觀念の表象が理想の人の表象と酷似することあるも、吾人の宗教的認識は明かに此表象が理想の人の表象に非ずして人間以上なる絶對的完全の實在の觀念の表象たるを解するなり。夫れ何れの宗教又何れの民族間にも聖人に關する宗教的物語或は豪傑に關する詩的傳說ありて理想の人を表象するなり。而も吾人の宗教的認識は常に明かに此理想と神の觀念とを區別し如何に未開民族の宗教に於て理想の人が諸神に髣髴することあるも決して此兩者を混ぜざるなり。神の觀念に於て人は自ら欺きて己を以て之に擬せんとせず却つて人の天性を超絶せる實在を認めんと欲するなり。凡そ一般の宗教的認識は神と人との間に無限の區別を置き毫も兩者の類似を許さゞるなり。卽ち一

般の宗教的認識は明かに人が決して神たるを得ざるを感ずるなり。然るに論者は此爭ふべからざる事實を無視し神の觀念を以て或る不明の途に由りて人の理想の變形したるものと爲し以て實際に有り得べからざる心理上の作用を許容す。

此の如く神の觀念と吾人の理想との間には根本的差別ありて此差別は明かに神の觀念が吾人の理想的作物に非ざるを證するなり。且つ一歩を進めて論ぜんか論者の論據とする彼の理想を作る能力の如きは神の觀念の本源たらざるのみならず却つて神の觀念に其存在を支持せらるゝもの也。若し實際に於て吾人に豫め無限の完全てふ觀念なかりせば、又完全を追求する傾向なかりせば何者が人をして現狀に不滿を懷かしめ一層完全を追求せしめ隨ひて此完全の觀念即ち所謂理想を作らしむるぞ。理想の存するは既に完全の概念の存するを想はしむるものにて吾人が實物に對し理想に對して不滿を感ずるは此概念が絶對的完全の觀念なるを示すものなり。斯く絶對的完全の觀念は神の概念を組成する根本の要素なり。而して神の觀念は凡ての完全を綜合したるものとして又吾人の傾向の目的として吾人をして理想を作らしむるの根源なり。此の如く理想を作る吾人の傾向及び能力は神の觀念の原因に非ずして廣

き意味に於ける宗教的觀念の結果と謂はざるべからず。

而して論者が神の觀念の出所を示さんとする論據即ち神の觀念中に存する神人同形の思想に至りては神の觀念の本質を成すに非ずして神の觀念の一部を成すに過ぎざるを知るに難からず。神の觀念は既に論ぜしが如く人間的完全を以て表せられず絶對的完全を以て表せられ、活ける絶對の實在として又凡ての完全の綜合として表せらるゝなり。若し論者の說の如く神人同形の思想若くは之に類する擬人の思想の諸點が神の觀念の實質を成すとせば此諸點の廢滅と共に其觀念も亦消滅せざるべからず。然るに宗教の歷史に徵するに擬人の思想は絶えず變遷するにも拘らず宗教上の觀念は之と共に廢滅せざるを見るなり。却つて人は一の擬人の思想に於て其虛僞なるを發見し若くは不滿足を感ずるとあれば更に他の正確なる概念を求むるなり。是れ明かに擬人の思想は人が其知識の程度に從ひて宗教上の觀念の內容を說明せんとする方法に過ぎざるを證するものなり。而して人が神を思想するに擬人を以てするは是れ人に於て固より免れざる現象なりとす。何となれば神の觀念は絶對の實在の觀念なるが故に此觀念の內容も亦無限ならざるべからず。然るに人智は有限なるが

故に無限の實在を適當に思想するを得ずして之を有限的に思想するなり。然れども之と同時に人は是等の思想を以て神の觀念の內容を悉したりと思惟せざるなり。之に依りて一方よりは宗敎的思想の變遷起り他方よりは凡ての宗敎に通有なる思想卽ち神は不可思議なりとの思想起るなり。凡そ多少進步せる宗敎中には神の尊嚴は凡ての記錄及び妄想の作物を超絕すとの認識の存するを發見するを得べし。故に若し神の觀念を以て理想の擬人なりとせば凡ての宗敎中に存する此認識を說明することを能はず。

凡そ宗敎が人類間に普遍なると又人類の爲に必需なるとは神の觀念が偶然的及び主觀的原因よりして出でしに非ざるを明證す。宗敎は全人類の歷史の活ける事實にして其發現の狀態は千差萬別なりと雖も本質に於ては皆同一にして均しく不變なるものなり。未だ人類の歷史存せざる以前より宗敎は既に存して吾人に宗敎的傳說を傳へ、少數なる傳說を除くの外古代人類の傳說は悉く宗敎的材料を含蓄し、其傳說は世界及び人類の原始の事、神が人々に顯現せし事、神と人との相互の關係の事、超自然の事及び之に類する事に涉らざるはなし。去れば古代人類の傳說は宗敎の歷史なりと言ふも敢て過言に非ず。此事實は宗敎が太古の歷史以前の時代に於て人類間に普及せしのみならず人類の精神界に獨占の勢力を有せしを示すものなり。彼の學藝、美術、社會の如きは後世に至りて漸く發達せしものにて太古に於て人類の精神界を支配せしは一の宗敎なりき。吾人は箇々の民族の現出と同時に宗敎が其社會に存せしを見る。宗敎上の信仰は或る民族が故意に發明せしものに非ずして彼等の間に祖先傳來のものとして存し太古より其形跡を彼等の歷史中に印す。宗敎は凡ての歷史的階級の民族に固結して離れず假令彼等の思想、風俗、及び歷史的事情は變遷することあるも宗敎は其存在及び根本の原理に於て毫も動搖せざるなり。而して知識の開發は宗敎の思想を健全ならしめ之を變形せしむと雖も宗敎其者を衰頹せしめ之を廢滅せしむること能はざるなり。故に若し知識の開發せる民族間に宗敎排斥の傾向起る場合ありとせば是れ唯だ道德頹敗の結果に過ぎずして人類の歷史に於ける不自然なる除外例の現象と爲すべきものなり。此の如く人若し既往の歷史に徵し現時の各民族の狀態に照せば必ずや宗敎の全人類に普遍なると其本質の價値とを知り得べし。

凡そ全人類の一般的及び必需的現象は偶然の現象に非ずして又偶然の原因より出づるものに非ず。若し吾人が人類の行爲に意味あり思慮あるの事實を排斥するを欲せざらんには人類が其本性より宗教を要求するの事實をも排斥するを得ず。然るに之に反して虛誕なる妄想の作物が吾人に對して此の如き非常の勢力を有すとせんか、是れ全人類をして慢性の瘋癲者と爲すものなり。何となれば人が虛誕なる妄想の作物を眞實に存在するものと爲し此妄想に一身を左右せらるゝが如きは實に瘋癲に外ならざればなり。此の如く宗教の客觀的價値を認めざる論者の說の如きは人類と人類の知識と歷史を無視し人類を以て數千年間に涉りて太古の妄想の作物を辨別するを得ざる最も不幸なる無智の存在物と爲すものなり。

以上論ぜし所に依りて若し道理を無視せざる限りは神の觀念が偶然及び主觀の產物に非ずして吾人の本性の要求なるを發見し得べし。而して更に論步を進め神の觀念の本源として最も近きものを求むれば吾人の理性なり。吾人の理性は推理を以て必然に神の存在を認め神の性質及び神と人との關係の概念を作るを得。而して吾人が或る物を識り或る物の存在を信ずるに二途あるなり。即ち吾人は或る物の作用を感受し其物の存在を認めたる時若くは或る物の作用を感受せざるも推理を以て或る物の必然的存在を認めたる時に或る物の實に存在するを信ずるなり。前者の途に依りて物の存在を認むるを實驗的と云ひ後者の途に依りて物の存在を認むるを理論的と云ふ。前者は有形の實驗的の物を識るの途にして後者は無形の必然的存在の物を識るの途なり。故に此後者の途は神の觀念の本源を說明するに最も便利なるものなり。何となれば吾人は理性に訴へて神の存在を認識し以て神の觀念を喚起するを得ればなり。

思想界の歷史に徵するに實に各種の論證例へば實體論、世界形質論、結局論等に於て神の存在の論證試られたり。即ち神の觀念の眞理は哲學上より論證せられたり。然れども此論證が果して神の觀念の本源を說明し得るか否かは疑問に屬するなり。カントの純理批判が一たび世に出でしより此問題は消極的に解決せられたり。神の觀念に關する彼が解剖的批判は既に世人の知る所なれば今茲に贅せず。又彼が神の觀念の價値に關して下せし斷案の不正確なることにも論及せざるべし。唯だ彼が解剖的批判に依りて所謂神の存在の論證なるものは嚴格なる意味に於て論證たる價値

を失へりと斷言するを得べし。神の存在の論證に於て斷案の眞理は既に前提中に包含せられ論證は唯だ斷案を說明し證明するに過ぎず。要するに神の存在の論證は若し此論證に先だちて神の存在の預想せらるゝに非ざれば其效果を擧ぐるを得ず。此の如く神の存在の論證は其性質上よりして吾人に神の觀念を喚起するを得ざるや明かなり。而して彼の論證に於て有らゆる方法を網羅して神の概念を喚起せしめんと力むるは却つて神の觀念の本源が理性の作用に非ざるを證するものなり。

尙神の存在の論證は其內容のみならず論證其者も亦神の觀念が彼の論證に依りて起りしに非ざるを示すなり。彼の神の存在の各種の論證は漸々世に現はれしものにて且つ少數の思想家の專有するものなり。然るに神の觀念は凡ての論證に先だちて既に人類間に存し且つ心理上の事實に徵するに此觀念は人智の推理より來るに非ずして吾人の直接の認識より來るなり。

今前論を立證するが爲に神の存在の論證の一たる結局論に就きて論評せん。此結局論は神の存在の論證の中にて最も古く且つ他の論證の如く抽象的ならず眼前の事實に訴ふるものなるが故に人をして其眞理を信ぜしむるに力あるなり。何となれば人は自然界の美なる調和の現象を觀察して此現象の原因を尋求し此原因が部分有限的の者に非ずして完全絕對的の者卽ち神たるを認むるに至るべければなり。

然れども一たび此論證を解剖せば此論證の價値なきを知るに難からず。人は神の存在を認むると同時に絕對の第一原因の存在を認むるなり。然らば何者が有限の現象と此現象の部分の原因に圍繞せらるゝ人をして其周圍の事物に超えて絕對的原因を尋求せしむるぞ。若し人に豫め絕對の原因の認識存せざらんには周圍の有限の事物を觀察して絕對の原因を尋求することなかるべし。人の理性は自然界の現象を觀察して之が近因を尋求するを常とし學理に涉るの外は目前の近因を尋求するを以て滿足するものなり。而して假りに人が自然界の現象の近因に滿足せざるとするも此場合に人が必ずしも終極の絕對の原因を尋求するの理なきなり。何となれば此場合に人は原因の上に原因を求め其原因を無窮ならしむべければなり。今一步を讓りて人の理性が終極の絕對の原因を尋求すと假定するも理性の判斷力が此自然界の現象の原因を以て必ずしも活ける箇位の最完全の者卽ち神なりと認識するの理あらんや。吾人は開發せる理性にして屢〻意志自由なき不定の物質を以て絕對の原因と

認識するの例を見るなり。去れば若し人が自然界の現象を觀察して終極の原因に想到することありとせば此事は太古に於てのみ有り得べきなり。何となれば人は知識の開發せざる時に於ては自然界の現象の終極の原因を以て感覺的及び有形的の者と思想し易ければなり。少くとも單に理性が終極の原因の觀念の本源ならんには吾人が其例を哲學に於て見るが如く此原因の觀念に種々の矛盾及び牴牾起らざるべからず。即ち人類の一部は神の觀念を認め他の一部は之を排斥し、一は宗教を有し他は宗教を有せざるべき也。然るに實際に於ては全く之に反するなり。即ち神の觀念を基礎とする宗教は一般の現象を成し神の觀念を排斥し神以外に絶對終極の原因を認むは直觀を斥けて純理に訴ふる後世の學者間に於ける小部分の現象に過ぎざるなり。

尙一歩を進めて論ぜんに宗教上に於ける神の觀念は終極原因に關して理性の起せし觀念に非ざるなり。何となれば假令理性が此原因の問題を解決するも理性に依りて解決せられたる此原因の觀念は到底宗教が有するが如き影響と勢力とを有すること能はざればなり。思想の歷史に徵するに智識界に勢力を有せし人々の發見に係る眞理は多く存するなり。然るに是等の眞理は社會全體に普及することなく且つ此眞理の發見者自身も之を確信せず自己の知識の正邪如何を疑ふを常とす。之に反して神の存在の眞理及び一般宗教上の眞理は吾人の知識及び心情を支配して非常の勢力を有するなり。故に若し神の觀念が理性の結果ならんには此觀念は他の普通觀念と同等に歸し吾人を支配する勢力を有することなかるべし。而して此觀念は宗教上の觀念に屬せずして唯だ學問上の眞理たらんのみ。又理性が終極の原因の發見者ならんには此觀念は宗教の內容を成す心理上の諸現象を出だすことなかるべし。何となれば此諸現象は神の存在の眞理の勢力より來るものにして理性の推理斷定より來るものに非ざればなり。

斯く理性は神の觀念を吾人に起すを得ずとせば此觀念の原因は吾人に存せずして吾人以外に存すとせざるべからず。然るに此觀念は吾人に於ける有形物體の作用の結果に非ず又吾人の理性が起せしものにも非ずとせば至上の實在者が實に存在して此實在者より來るものとせざるべからず。故に神の觀念は神自身より出でたるものなり。然れども斯く論定せしのみにては未だ漠として神の觀念の出所を說明したるものに非ず。是に於てか左の疑問即ち神の觀念は如何にして出でしかの疑問生ず。

此疑問に對する答案中最も著名なるものは先天的觀念說なりとす。其說に曰く、人類の知識には先天的の觀念卽ち神、眞理、善其他の觀念存す、是等の觀念は凡ての推理に先だちて發動するものなるが故に固より感覺より來るに非ず又抽象より來るに非ず、何となれば有終的の者は無終的の者の觀念を與ふる能はず有限的の者は無限的の者の觀念を與ふる能はざればなり、故に神の觀念は先天的に吾人に存すとせざるべからず、神の觀念は神より吾人の靈魂に賦與せられたるものにて吾人の靈魂に於ける天賦固有のものなりと（先天的觀念說は始めてシセロに依りて唱へられ後ちデカルトライブニッ及びウォルフに依りて唱道せられたり）。

然れども此先天的觀念說は神の觀念の出所問題を明確に說明したるものに非ず。若し先天的觀念說は觀念が實驗より來らず理性に依りて起されしに非ずと否定するに止まらば吾人は此說に依りて觀念の出所問題が解決せられずと雖も之を受くるに躊躇せざるなり。去れど先天的觀念說は觀念が吾人の意識に確定せる概念として存すと說明する者ならんには多くの疑問を生ずるなり。卽ち先づ起る所のものは先天的神の觀念とは果して何を指すかの疑問なり。換言せば神の觀念の千差萬別なる場合に何れを先天的と爲し又何れを非先天的と爲すかの疑問なり。一部の先天的觀念論者は神の觀念の定義として一定の概念を示せり（デカルト曰く我は神とは一切萬物を造りし無終、獨立、全能及び靈智の實體なりと解す、此の如き實體の觀念は固より我自身より出づるを得ず、何となれば我は自己を不自由、微弱、有限の者と認むればなり、故に我以外に我が有する觀念の實在存在せざるべからずして此實在のみ我に此の如き觀念を與ふるを得るなり……此觀念は我に固有し我自身の存在と共に我に存すと）。然れども此の如き概念を先天的のものと爲すは實驗上の事實に反するものなり。何となれば吾人は實驗に徵して此の如き觀念は多數の人に存せず又多數の人に存する神の觀念はデカルトの示すが如き觀念に非ずして甚だ曖昧不定虛僞のものたるを見ればなり。尙吾人はデカルト及び其一派の論者の先天的と爲す觀念に於て論理的思索の形跡を認むるのみならず他の凡ての神の觀念に於て其程度に應じて智力の關與したる形跡を認むるなり。若しデカルト及び其一派の論者の說の如く觀念が一定の眞理概念として先天的に吾人に存するものならんには各人に存する觀念は皆同一にして未だ知識の開發せざる時に於て既に明確に理性に認識せられ

此疑問に對する答案中最も著名なるものは先天的觀念說なりとす。其說に曰く、人類の知識には先天的の觀念卽ち神、眞理、善其他の觀念存す、是等の觀念は凡ての推理に先だちて發動するものなるが故に固より感覺より來るに非ず又抽象より來るに非ず、何となれば有終的の者は無終的の者の觀念を與ふる能はず有限的の者は無限的の者の觀念を與ふる能はざればなり、故に神の觀念は先天的に吾人に存すとせざるべからず、神の觀念は神より吾人の靈魂に賦與せられたるものにて吾人の靈魂に於ける天賦固有のものなりと（先天的觀念說は始めてシセロに依りて唱へられ後ちデカルトライブニッ及びウォルフに依りて唱道せられたり）。

然れども此先天的觀念說は神の觀念の出所問題を明確に說明したるものに非ず。若し先天的觀念說は觀念が實驗より來らず理性に依りて起されしに非ずと否定するに止まらば吾人は此說に依りて觀念の出所問題が解決せられずと雖も之を受くるに躊躇せざるなり。去れど先天的觀念說は觀念が吾人の意識に確定せる概念として存すと說明する者ならんには多くの疑問を生ずるなり。卽ち先づ起る所のものは先天的神の觀念とは果して何を指すかの疑問なり。換言せば神の觀念の千差萬別なる場合に何れを先天的と爲し又何れを非先天的と爲すかの疑問なり。一部の先天的觀念論者は神の觀念の定義として一定の概念を示せり（デカルト曰く我は神とは一切萬物を造りし無終、獨立、全能及び靈智の實體なりと解す、此の如き實體の觀念は固より我自身より出づるを得ず、何となれば我は自己を不自由、微弱、有限の者と認ひればなり、故に我以外に我が有する觀念の實在存在せざるべからずして此實在のみ我に此の如き觀念を與ふるを得るなり……此觀念は我に固有し我自身の存在と共に我に存すと）。然れども此の如き概念を先天的のものと爲すは實驗上の事實に反するものなり。何となれば吾人は實驗に徵して此の如き觀念は多數の人に存せず又多數の人に存する神の觀念はデカルトの示すが如き觀念に非ずして甚だ曖昧不定虛僞のものたるを見ればなり。尙吾人はデカルト及び其一派の論者の先天的と爲す觀念に於て論理的思索の形跡を認むるのみならず他の凡ての神の觀念に於て其程度に應じて智力の關與したる形跡を認むるなり。若しデカルト及び其一派の論者の說の如く觀念が一定の眞理概念として先天的に吾人に存するものならんには各人に存する觀念は皆同一にして未だ知識の開發せざる時に於て既に明確に理性に認識せられ

ざるべからず。何となれば凡ての觀念は知識にして知識は認識を伴ふものなればなり。然るに吾人は凡ての人が其初時より明晰なる神の概念を有するを見ざるなり。故に此の如き神の概念は先天的に吾人に存するに非ずして吾人の理性の幇助に依りて得らるゝものとせざるべからず。

此論駁の眞理たるは爭ふべからざる事實にして先天的觀念論者と雖も其眞理たるを認めざるを得ざるなり。是に於て先天的觀念論者は各人通有の眞實の先天的觀念を發見するが爲に神の觀念中より人智の關與せし形跡あるものを悉く除去せざるを得ざりき。然るに彼等は各人通有にして眞個に先天的と謂ふを得べきものを發見せんとするに方りて觀念其者が漸々稀薄と爲り遂に消散するを見たり。而して今や先天的として認め得べきものは人が自己を圍繞する物質以外に何者か至上なる者を尋求するの傾向のみなりき。之に依りて先天的神の觀念は先天的に人の有する神の概念に非ずして唯だ其種子なりとの解釋現はれ、一方の論者は之を解釋して神の概念を起し得るの能力と爲し、他の論者は之を解釋して無限者に達せんとするの傾向と爲せり。然れども觀念を單に能力若くは傾向と爲すは其目的とする觀念の出所を說明したるものに非ず。人に神の概念を起すの傾向あり此の如き概念を起し得るの能力及び要求あるは一般の眞理にして斯る說に對して固より實驗論物も神の觀念の眞理を認めざる者も敢て反對せざるべし。去れど問題は吾人に或る者を識らんとする先天的の傾向あるか否かの點に非ずして其物に對する知識が如何にして出でしかの點なり。然るに先天的觀念說は一の不定なる傾向を觀念と名づけし外毫も此事に論及せず、此傾向が如何にして實行せらるゝか如何にして發展せらるゝかを說明せざるなり。若し論者の論ずるが如きの意味に於て觀念は先天的なりと謂ふを得べくんば家屋、樹木、書籍等の概念をも先天的と謂はざるべからず。何となれば是等の物を念想し之を識らんとする能力、傾向、要求は同じく吾人に存すればなり。去れば論者の說は其語法を誤れると明かにして適當に其意義を表せんには吾人が先天的に有するは觀念に非ずして智力即ち觀念を起すの能力若くは至上の存在物を識るの能力なりとせざるべからず(先天的觀念說は其本質に於て哲學の趣意に反するものなり、哲學の目的は觀念の起る原因及び方法を說明するに在り、然るに先天的觀念說は觀念の起る原因を研究するの前途を壅塞し觀念が說明を要せざる既知のものとして先

天的に吾人に存するの事實を認めんことを要求す)。去れど至上の實在を識るの能力を先天的と爲すも尙吾人は如何にして此能力が至上の實在を正確に認識せしむるか如何にして智力が觀念を得せしむるかの疑問を解決すること能はざるなり。

吾人は前段に於て物の存在及び性質を識るに二樣の方法あるを說けり。卽ち一は實驗の方法にして他は理論の方法なり。然るに理論の方法は神の觀念の出所を說明し得ざることは前論の示す所なれば今は實驗の方法に轉じ此方法に訴へて神の觀念の出所問題を解決せざるべからず。

凡そ實驗の方法に訴へて實存の物を識るに必要なるものは何ぞと問ふに、之に必要なるものは〔ひ〕實際に存在する物と其物の吾人に於ける作用〔ろ〕之に對する正しき吾人の思想なり。吾人に於ける物の作用は吾人に物の存在の保證を與ふ。而して物に對する吾人の思想は吾人に物の知識を與ふ。而して物の存在を直接に認むると思想の法則に從ひて此存在を識るとは共に吾人の知識の必要なる要素を成すなり。卽ち前者を缺かば吾人の知識は眞實のものに非ずして形式に過ぎざるものと爲り、後者を缺かば吾人は物の感覺のみを有して物の知識を有せざるに至らん。然らば今此知識の法則を至上の實在に應用し得ざるか。若し應用し得るとせば吾人は凡ての觀念就中神の觀念を一方よりは至上の實在自身が吾人の心意に及ぼす作用に歸し他方よりは此作用に對する吾人の思想に歸せざるべからず。之に依りて神の觀念は神の外部の作用と吾人の思想の內部の活動との二者が結合したる結果なりと論ぜざるべからず。

一　神の觀念は吾人の心意に於ける神の作用より來るなり。此作用の有り得べきことは明かにして毫も疑ふべからざるなり。若し外界の物が吾人の官能に感覺を與へ吾人の心意に作用を及ぼすのことを排斥するを得ざらんには靈界の物殊に神が吾人の內部の官能に此の如き作用を及ぼすのことをも亦排斥するを得ざるなり。何となれば人は肉體の存在物なるのみならず靈及び智の存在物なればなり。而して神と人とは其性に於て異なるも此事は神が吾人の心意に作用するを妨げず。是れ猶吾人と外界の物と其性に於て全然異なるも吾人に於ける物質の作用を妨げざるが如し。若し吾人の心意と物質とが其性に於て全然異なるにも拘はらず吾人は認識に基きて外界の物の作用を眞實として認むるを得んには猶一層吾人の心意に於ける靈物の作用

を認めざるべからず。何となれば吾人の理性は凡ての場合に於て物質界に於けるよりも神靈界に親和し易ければなり。

吾人の心意に於ける此の如き神の作用は吾人の知識に神の觀念が必然に存すべきを推測せしむ。而して此觀念が人類に普遍なると又理性の如何なる推理をも俟たず直接に人をして信ぜしむる勢力を有するのことは神の存在の認識が吾人に於ける神の能力及び作用の直觀の結果に外ならざるを知らしむ。

斯く吾人の心意に於ける神の直接の作用を認むるは先天的觀念說の缺點を補ふものなり。先天的觀念說は其歸する所吾人の心意に無限の實在を識るの能力及び傾向の存するを認識するに在りて其眞理の方面は此認識にのみ含蓄せらる。然れども識るの能力は自身より識るの物を出だすを得ず。故に識るの能力をして單に不定の能力たらしめず實際の知識の能力たらしめんには此能力に對する實在の作用を認めざるべからず。先天的觀念說は唯だ知識の主觀的要素卽ち至上の實在を識るの能力のみを認めて此能力に對する至上の實在の作用を忘失したり。論者或は言はん、觀念を先天的若くは神より吾人の靈魂に賦與せられたりと認むる時は既に此の如き神の作用を認むるものなりと。去れど斯く論ずる時は此の如き神の賦與は人の靈魂が創造せらるゝ時に一時に行はれ以後吾人の心意に於ける神の作用斷絕し吾人の知識は創造の時に賦與せられたる觀念の定義を敷衍するに止まるものとせざるべからず。而して此の如き見解は活ける及び永遠に活動する者としての神の定義に矛盾し且つ人が靈性的存在物なることの定義に矛盾す。

去れど吾人は吾人の心意に於ける神の直接の作用を神の觀念の本源と認むると共に此直接の作用及び知識なる語に就きて一言せざるべからず。彼の先天的觀念說は人と神とを離隔して兩者を遠く立たしむる者なるが如く神の直接の作用の知識は神と人とを其度に超えて餘りに接近せしむるの觀あり。故に今此點に就きて辯ぜんに神を直接に識ること或は正しく言へば神を認識することは神を直接に解すること及び神を直接に冥想するのことゝ同一に非ざる也。吾人は神に關する知識を直接の知識と呼ぶも此直接なる語は字義的の意味に於て用ゐらるゝに非ず。例へば吾人は官能の知識のこと物の感覺及び觀察のことをも同じく直接の知識と呼び此語を以て官能の知識が理性の幫助卽ち抽象的推理を待たずして出でたるの意を表す。然れども適

切なる意味に於ては此知識は直接の知識に非ず。何となれば此知識に於て外物は直接に靈魂に受けらるゝに非ずして視官聽官を經て受けらるればなり。之と同じく吾人が吾人の心意に於ける神の作用を直接の知識と呼ぶも此語が字義的の意味に於て用ゐらるゝに非ざるを記せざるべからず。

凡そ外物は吾人の靈魂に直接に入り直接に觸るゝに非ずして吾人の官能を經て吾人に作用するが如く至上の實在も亦其性に適合する官能即ち所謂内部の官能なる智能を經て吾人に作用するなり。去れど此至上の實在に關する知識は完全なる知識に非ずして至上の實在を感受する其機能の主觀に束縛せらるゝを免れず。吾人は此事を官能の知識を引用して説明するを得べし。吾人は官能の感受に於て物を適切に識るを得ずして唯だ官能が吾人に與ふる其度に於て識るなり。即ち吾人は官能の知識に於て物其者を識るに非ずして物より來る感覺のみを識るなり。之と同じく至上の實在に關する知識に於ても亦吾人は神より來る直接の感覺を感受するを得べしと雖も神性を完全に適切に識りたりと爲すを得ず。吾人は神の作用を直接に感受するに非ずして或る機關即ち智能を經て感受するなり。去れば此機關の感受の定則は當然に

其知識に反映せざるを得ず。

斯く吾人の心意に於ける神の作用は神の觀念の本源として認めらるべきものにして吾人の心意に於ける神の作用の認識は神の存在の認識若くは神に於ける信仰の唯一の基礎なり。然れども物の存在の信仰は唯だ知識の第一の發動に過ぎずして物の存在の感覺若くは認識を物に關しての知識たらしめんには更に吾人の智力の新發動を要するなり。此智力の新發動とは曩に論ぜしが如く吾人の思想を指すものにして此思想は神の觀念を起す第二の要素を成すものなり。

二　官能の知識即ち物の感覺は吾人をして物の存在を信ぜしむるも此知識は吾人に對して有力なるものに非ず。吾人は物の感覺若くは知覺のみを以て滿足せざるなり。即ち感覺に次ぎて或は感覺と同時に吾人の理性は感覺を種々の概念に改造し物の感覺を物の知識たらしむ。此の如き知識の定則は觀念の上にも適用するを得べし。或る論者等が（例へばヤコビの如き）如何に冥想若くは内部の感覺を尊重し如何に理性を蔑視するも吾人は思想が吾人の知識の正しき唯一の機關たるを認めざるを得ず。至上の實在を識るに唯だ直接の冥想若くは感覺のみを以て足れりと爲すは實驗の知

識に於て吾人が一の知覺に滿足し以て物に關する概念を作らんとするに異ならず。故に至上の實在の直接の感覺は人智の定則上其原形を維持するを得ざるものにして感覺は吾人をして神の存在を信ぜしめたる後必然に吾人の思想力に研究せられ種々の概念に改造せらるべきものなり。

宗教及び哲學の歷史は思想が實に神に關する知識の正當なる實質の要素なるを明示す。吾人は單純なる及び直接の神の感覺のみを見ることなくして千差萬別なる具體的の神の概念を見るなり。即ち吾人は實際上に於て單純なる神の觀念を見ずして複雜なる神の觀念を見るなり。若し神の觀念が直接の感覺の結果ならんには凡ての人を通じて凡ての時を通じて此觀念は同一ならざるべからず。何となれば此觀念の對象なる神は常に同一なれば凡ての人に於ける神の作用も亦同一なるべき筈なればなり。有形物體は變遷する性質のものとして其感覺をも變遷せしめ時に應じて其感覺を異にせしむるものなり。然れども此事を神に適用するを得ざるは勿論にして神の觀念と其作用は常に同一ならざるべからず。然るに事實は全く之に反す。吾人は種々の人に於て種々の時に於て神の觀念が千差萬別なるを見る。然らば此一般の現象

は何を意味するか。若し至上の實在に關する知識に於て吾人は神の作用を他動的に感受するに止まらば吾人の思想の關與が認めらるゝ神の觀念を吾人は純然たる迷想とせざるを得ざるべし。

去れど若し神の觀念は客觀的の要素のみならず主觀的の要素をも含蓄し又至上の實在に關する知識は感覺のみならず思想をも要求すとせば、宗教及び哲學に多樣なる神の觀念の存するは敢て異むに足らずして却つて當然の現象なりとす。抑も宗教上の認識力は殊に外界に向ひ神を表象するに外界の現象及び此現象に喚起せられたる主觀の感覺を以てす。次に人の認識力は人自身の中に於て完全の記號を發見す。即ち初め人の靈肉二性の合體中に於て之を發見し後ち純然たる靈性の方面に於て之を發見す。而して此完全の記號を綜合して最完全なる實在の表象を作る。最後に人の認識力は靈肉の兩性中に於て發見したる神人同形の表象に滿足せず之に代ふるに神の概念を以てす。去れど此凡ての宗教上の認識中には多くの眞理の影及び變遷の時期の含蓄せらるゝこと勿論にして、此眞理の影及び變遷の時期を研究し之を論評する

は宗教哲學の事業なり。而して凡ての場合に於て宗教上の概念の千差萬別なる一般の原因は感覺に次ぎて神の觀念の第二の要素たる思想の性質の如何に存す。

然れども斯く論ずる時は茲に一の疑問生ずべし。即ち若し神の觀念は吾人の心意に於ける神の作用より出で恰も吾人の官能に於ける外物の作用が吾人をして物の存在を信ぜしめ外物に關する知識の基礎たるに類すとせば、何故に此觀念は吾人の官能に於ける外物の作用の如く吾人の智力に容易に認識せられ又明瞭に解せられざるか、何故に吾人の有する神の概念は千差萬別にして官能の知識は一定なるかの疑問是れなり。

今此疑問に答へんに吾人は神の觀念が外物の存在が認識せらるゝの度に於て吾人に認識せられずとの事實を疑はざるを得ず。宗教が人類社會に普遍なると且つ不易なるは却つて之に反する事實を示すものにして、人は物質界の存在を信ずると同等に神の存在を信ずる也。故に論者若し神の觀念が吾人に於ける神の作用の認識に基くにも拘らず多くの人が神の存在を疑ひ神を排斥するの例を引用するを得べくんば、吾人も亦外物の感覺の存するに拘はらず多くの人が有形物體の存在を疑ひ其存在の眞實を排斥するの例を引用するを得べし。而して此前者と後者の現象は其性質に於て同一の者なり。何となれば兩者共に學説に屬し共に人類社會に於ける例外の思想を成すものなればなり。去れば唯物論の存するは吾人に於ける至上の實在の作用の眞實を否定するものに非ざるが如く唯心論の存するとも亦吾人に於ける物質の作用の眞實を否定するものに非ず。然れども神の觀念が外物の知識に比して吾人に明瞭に解せられざるは事實にして、此點に於て吾人は人の弱點を認めざるを得ず。

次に何故に官能の知識は瞭然にして至上の實在の概念は漠然なるか、何故に自然界に關する吾人の知識は一定して靈界に關する吾人の知識は區々なるかとの疑問に答へんに此現象は吾人が靈界に對するに正しき方法を缺くを證するものなり。凡そ物を分明に的確に識らんには自然界に於ても物を識るの健全なる正しき機關及び物を識らんとする傾向を要するなり。而して外部の官能の種々の程度及び傾向は官能の知識を種々の階級に區別するが如く內部の官能の種々の性質も亦靈界の眞理の感受を區々ならしむ。又外部の官能は鍛錬に依りて鋭敏を得るが如く內部の官能も亦其機能を應用するに依りて鋭敏を得るなり。而して此內部の官能の

純潔健全は德質の純潔健全より來り鍛錬は善行より來るなり。又一方に於て神は吾人の知識の目的物たるに止まらず吾人の靈性の傾向の目的物なり。卽ち神は最完全及び最善の者なれば吾人が神に接近し神を的確に感覺せんには純潔なる靈性の眼及び神を尋求する發達せる傾向を要す。若し夫れ此の如く內部の官能の明不明と其機能の强弱は吾人の德質より來るとせば何故に吾人の神に關する概念は漠然なるか、何故に或る人々の至上の實在に關する知識は全く空虛なるかの疑問も亦之に解決せらるゝなり。神以外の他の物に關する知識に於ては德質的要素は其知識の構成に影響を與ふること大ならず。例へば官能の知識に於ては德質の人に在りても不德質の人に在りても其知識の眞理は同一に解せらるゝなり。去れど神に關する知識に於ては德質の要素は此知識の構成に至大の關係を有するなり。然れども實驗に徵するに德質的作用の過程は外部の官能の作用の過程の如く必ずしも規則的ならざるを見る。是に於て神に關する吾人の感覺の不明瞭及び薄弱幷に神に關する吾人の知識の不完全を補ふが爲に自然以上の特別なる啓示の必要起るなり。（完）

神の觀念の本源を論ず

正價金四錢

明治三十九年三月三十一日印刷
明治三十九年四月　十　日發行

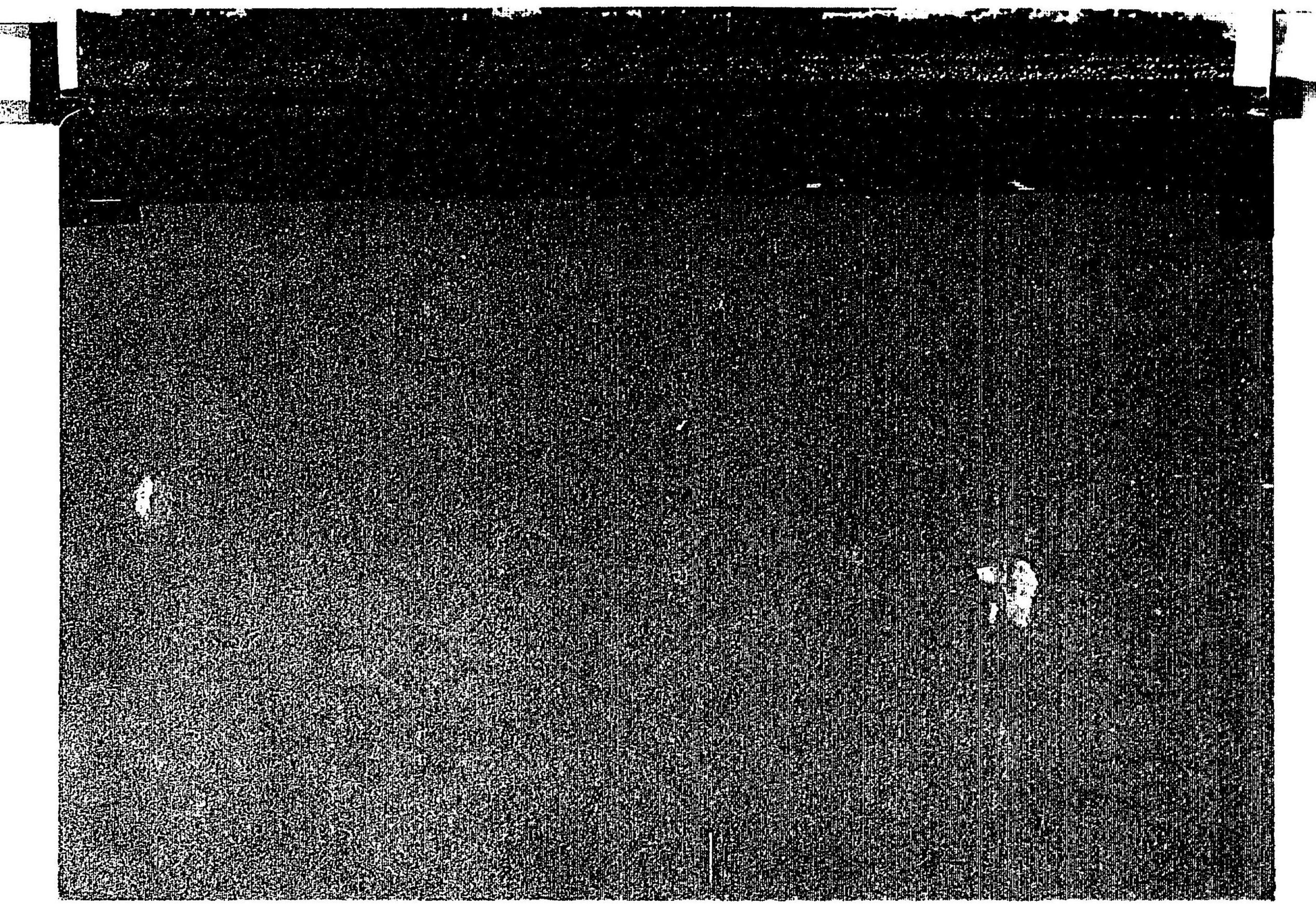
飜譯兼發行者　東京府下豐多摩郡千駄ヶ谷村九百八十七番地　松本高太郎

印刷者　東京市京橋區南小田原町二丁目九番地　中野鉄太郎

印刷所　東京市京橋區築地三丁目十五番地　帝國印刷株式會社

發行所　東京神田區駿河臺紅梅町六番地　正教會事務所

B-7



神の觀念の本源を論ず

ウ・デ・クドリャフツエフ

国立国会図書館

特
2

020337-000-2

特49-210

神の観念の本源を論ず

ウ・デ・クドリャフツエフ／著

M39

ABI-0143